

暴かれる「秘密」の真偽

— 『レディ・オードリーの秘密』 —

木原 貴子

The Authenticity of the Secrets Disclosed in *Lady Audley's Secret*

Takako KIHARA

英国ヴィクトリア朝の女性作家メアリー・エリザベス・ブラッドン (Mary Elizabeth Braddon, 1837-1915) によって出版された『レディ・オードリーの秘密』 (*Lady Audley's Secret*, 1862) は、当時の文壇で大人気を博したセンセーション・ノヴェルを代表する作品の一つである。「センセーション・ノヴェルの最も純粋な形は、秘密のある小説である」(xv) というキャスリーン・ティロットソン (Kathleen Tillotson) の言葉や、センセーション・ノヴェルとはショッキングな秘密を暴露する物語と指摘するアンナ・マリア・ジョーンズ (Anna Maria Jones, 7) の言葉が示すように、センセーション・ノヴェルと秘密は極めて密接な関係にある。

『レディ・オードリーの秘密』という作品は、題名が如実に表すように、レディ・オードリーなる女性の「秘密」を巡って仕掛けられる隠蔽と暴露のせめぎ合いの物語である。さらに、キャサリン・モントウィラー (Katherine Montwieler) が (レディ・オードリーの部屋の描写に言及して) 「寝室の秘密を大衆の面前にもたらしした」(57) と述べているように、この作品では登場人物の「秘密」だけでなく、これまで語られなかった当時の女性の生活に関わる「秘密」をも暴露しているのである。

本論ではこの作品の「秘密」について考察するが、物語中の秘密や時代風俗に関わる秘密だけでなく、ヴィクトリア朝という時代においてこれまで避けられ、触れられなかった女性性にまつわる幾つかの「秘密」をも明らかにしていきたい。

1 「秘密」の奥にあるものへの関心：近代ジャーナリズムの確立

『レディ・オードリーの秘密』は、准男爵マイケル・オードリー卿 (Sir Michael Audley) の妻となった、若く美しい女性レディ・オードリーの謎めいた過去を、オードリー卿の甥ロバート・オードリー (Robert Audley) が所謂探偵役となり、探っていく物語である。彼女は、名前を偽り、身元を隠してオードリー卿と結婚する。しかし、実はすでにジョージ・トルボーイズ (George Talboys) という男性と結婚しており、彼が現れると彼を殺そうとするなど、秘密を守るために放火や殺人未遂を行なう。結局ロバートによってすべての罪を暴かれ、ベルギーの精神病院に生涯幽閉される。推理小説の要素をも孕むこの物語は、秘密から始まり、罪の告発を経て、幽閉 (と死) という結末まで、秘密を隠そうとする者とそれを暴こうとする者の闘いの過程を描いたものである。

19世紀に確立した所謂近代ジャーナリズムは、犯罪に関する大衆の変化に迅速に対応したものと考えられる。村上直之氏は『近代ジャーナリズムの誕生—イギリス犯罪報道の社会史から』

の中で次のように述べている。

一九世紀以前の殺人事件を唄ったブロードサイドや犯罪パンフレットが事件発生の時点ではなく、公開処刑の時点で発行されていたという事実をみてきたが、事件がその発生の時点に焦点をあてて大々的に報じられるようになるのは、一九世紀に入って、とりわけ日曜新聞の紙面によってなのである。そうした報道が可能になるのは……事件の発生とそれ自体をひとつの結果としてものがたることを可能ならしめる原因論的な言説空間、つまり事件の個別性とその原因、犯罪者の性格特性などの犯罪動機理解を中心とするプレ＝アクティブな（つまり事前の）知のまなざしの成立が不可欠である。(233)

殺人などの犯罪に関する従来の報道は、事件の結末として、犯罪者の公開処刑（の予告や執行）が告知されるにすぎなかった。しかし、「なぜ」「どのようにして」事件は起きたのかという事件の背景解明への関心が芽生え、探られ、語られるようになる。¹大衆の意識の変化は、(識字率の上昇や印紙税の廃止など出版物を取り巻く環境の整備とともに)数多くの新聞・雑誌の創刊を促し、情報の大衆化を本格化させ、多種多様な情報を社会に行き渡らせたのである。1842年には時事ニュースを扱う出版物の先駆けとして『イラストレーテッド・ロンドン・ニュース』(*Illustrated London News*)が創刊され、また、犯罪報道に特化した新聞としては『イラストレーテッド・ポリス・ニュース』(*Illustrated Police News*)が1864年に創刊されている。こうして情報源の増加と多様化に伴い、犯罪に対する大衆の関心や理解がさらに一層促されたのである。

『レディ・オードリーの秘密』という作品においては、秘密や犯罪というセンセーショナルな要素がまず読者を作品世界へ誘う。そして、(近代ジャーナリズムの誕生による犯罪に対する意識変化を鑑みれば、自然に)読者の次なる関心を主人公レディ・オードリーが罪を犯すに至る過程や原因へと向かわせるのである。これは、作品における秘密を巡り対峙する二つの視点と呼応している。一つは、物語の探偵役ロバート・オードリーの視点である。彼の役目は、レディ・オードリーの秘密と犯罪、反社会性を暴き、物語世界に社会的秩序を回復することである。彼にとって重要なのは彼女の行為とその結果である。もう一つは、秘密と犯罪の主体であるレディ・オードリーの視点である。彼女の視点から、彼女の辿った人生を遡り、検討することで罪を犯すに至る過程とその理由を明らかにすることができるのである。そして、この二つの視点から語られ、開示される真実に時代の「秘密」を見ることができるのである。

2 「秘密」の暴露と犯罪者の末路

レディ・オードリーは、(偽の電報などの)小さな秘密を積み重ねるが、それはルーシー・グレアムという偽名を使った身分詐称、オードリー卿との重婚、ジョージの殺害(実際には未遂)、証拠品の窃盗、放火とロバートの殺害未遂という、より大きな秘密を守り、犯罪を隠すためである。彼女の行為だけを見れば、彼女は間違いなく犯罪者である。

当時の批評家は、『レディ・オードリーの秘密』を女性作家によって書かれた女性犯罪者の物語として厳しく批判した。とりわけ、ブラッドンと同時代の作家であり、批評家であったマーガレット・オリファント(Margaret Oliphant)は、ブラッドンの小説を「悪徳」の物語と厳しく糾弾している(175)。また、現代の批評家も、(レディ・オードリーをはじめ)ブラッドンの描く女性たちが当時の社会規範とは相容れない存在であると指摘する。例えば、リン・ピケット(Lyn Pykett)は、ブラッドンの女性たちの「不適切な女性性」(92)を論じている。

また、モントウィラーも、女性登場人物たちが「信心深く従順な娘／妻という中流階級の家庭的理想像に挑戦している」(47)とその反社会性を指摘している。

犯罪と反社会性ゆえにレディ・オードリーは罰せられる。彼女の秘密と犯罪を暴いたロバートは、彼女の処遇を決めるために精神科医モスグレイヴ (Dr. Mosgrave) を招く。彼女の犯罪が(白痴の母親から遺伝した)狂気ゆえの行為と診断されることで、オードリー家の家名に傷がつくことを避けたいとの思いからである。しかし、モスグレイヴは彼女の狂気を否定する。

“Because there is no evidence of madness in anything that she has done. She ran away from her home, because her home was not a pleasant one, and she left it in the hope of finding a better. There is no madness in that. She committed the crime of bigamy, because by that crime she obtained fortune and position. There is no madness there.”
(377)

ロバートの口から語られたレディ・オードリーの行動(身分詐称や重婚)は、動機も方法も理に適っており、論理の破綻や狂気は感じられないと断言する。しかし、診察するため、実際にレディ・オードリーと対峙したモスグレイヴの考えは一変する。

“There is latent insanity! Insanity which might never appear; or which might appear only once or twice in a life-time. It would be *dementia* in its worst phase perhaps: acute mania. . . . The lady is not mad; but she has the hereditary taint in her blood. She has the cunning of madness, with the prudence of intelligence. I will tell you what she is, Mr. Audley. She is dangerous!” (379)

彼女に対する診断は、「狂気」(“madness”)というより「異常」(“insanity”)であり、何よりも、「危険」(“dangerous”)であるというものであった。レディ・オードリーの二重性、すなわち、彼女の犯した罪と人物像(外見の美しさや幼さ)の大きな乖離に、モスグレイヴは戦慄する。そして、彼女が(ジョージ、オードリー卿、ロバート、そしてモスグレイヴ自身を含めた)男性と社会にとって如何に「危険」であるかを実感するのである。彼女について「互いによく理解した」(379)モスグレイヴとロバートは彼女への処分を決定する。ここで注目すべきは、レディ・オードリーが罰せられる理由は、犯した罪や狂気の所為ではなく、危険性ゆえだということである。彼女はベルギーの精神病院へ生涯幽閉されることになる。

“From the moment in which Lady Audley enters that house,” he (Dr. Mosgrave) said, “her life, so far as life is made up for action and variety, will be finished. Whatever secrets she may have will be secrets for ever! Whatever crimes she may have committed she will be able to commit no more. If you were to dig a grave for her in the nearest churchyard and bury her alive in it, you could not more safely shut her from the world and all worldly associations.” (381)

永久に秘密を守り、罪を繰り返させないために、そして、世間との接触を避けるために、レディ・オードリーは「生き埋め」よりも完全に社会から隔絶されるのである。実際、彼女はこの施設

で、ロバート以外の誰にも知られることなく、短い生涯を閉じる。

男性にとって危険で秩序を乱す存在、すなわち、男性を騙し殺そうとした「危険な女性」レディ・オードリーは社会から排除され、誰の目にも触れない場所に隠匿される。その後、彼女の二人の夫（オードリー卿とジョージ）は平静を取り戻し、平穏な日常生活を営む。こうして、物語世界には秩序が回復し、男性中心の社会が再構築される。この世界の中心でロバート・オードリーは「最後に、良い人はみんな幸せで平和になった」と勝利宣言をする。罪を犯したレディ・オードリーは罰せられ、「良い人」は幸福になり、大団円を迎えたのである。

3 「レディ・オードリー」の誕生に秘められた秘密

主人公レディ・オードリーはいかなる女性だろうか。彼女の美しさは繰り返し描写されている。彼女の「薔薇色の唇、優雅な鼻、豊富な亜麻色の巻き毛」(52) は称賛的である。ロバート・オードリーでさえ「最も美しい人」(“the prettiest little creature,” 56) と述べている。レディ・オードリーには特筆すべき特徴が二つあるが、その一つが万人を魅惑する不思議な力である。次の引用で言及されているルーシー・グレアム(Lucy Graham)とはレディ・オードリーの旧姓である。

..Miss Lucy Graham was blessed with that magic power of fascination by which a woman can charm with a word or intoxicate with a smile. Every one loved, admired, and praised her.... The verger at the church..the vicar..the porter from the railway station..her employer; his visitors; her pupils; the servants; everybody, high and low, united in declaring that Lucy Graham was the sweetest girl that ever lived. (6)

ここで挙げられている教会の堂守や駅のポーターの他にも、慈善訪問先の老婆や門番の少年など、貴賤を問わず、すべての人を引きつける「魔法の力」が彼女には備わっている。さらに、「彼女はどこに行っても、歓びと明るさをもたらすようだった」(5)という言葉が示すように、彼女には人を幸せにする不思議な力があることも示唆されている。そして、ピアノや絵画をはじめ才芸に恵まれ、幅広い教養を持ち、逆境にも穏やかに対処できる女性、また、優しく人好きのする、穏やかな性格で、野心のない女性である(5-6)。こうした特徴は、ヴィクトリア朝の理想の女性像である「家庭の天使」(Angel in the House)を彷彿させる。当時の理想の女性像について、デボラ・ゴース(Deborah Gorham)は次のように定義している。

She (the ideal woman) would be innocent, pure, gentle and self-sacrificing. Possessing no ambitious strivings, she would be free of any trace of anger or hostility. More emotional than man, she was also more capable of self-renunciation. (4-5)

優しく、感情豊かで、野心を持たないという特徴は、先に挙げた彼女の特徴と共通している。中でも、「家庭の天使」として最も重要な特徴は「子ども」のように純粋無垢なことである。この点に関して、ナタリー・シュレーダー(Natalie Schroeder)は、ヴィクトリア朝の「結婚」に関するイデオロギーにおいて「家庭の天使」には「子どもの資質、とりわけ、無垢、性的清純、依存が備わっていること」(119)が理想とされていたと指摘している。レディ・オードリーの特筆すべき二つ目の特徴は、まさしくこの「子どもの資質」である。

That very childishness has a charm which few could resist. The innocence and candour of an infant became in Lady Audley's fair face, and shone out of her large and liquid blue eyes. . . . She owned to twenty years of age, but it was hard to believe her more than seventeen. Her fragile figure, which she loved to dress in heavy velvets and stiff rustling silks, till she looked like a child tricked out for a masquerade, was as girlish as if she had but just left the nursery. (52)

レディ・オードリーには抗いがたい魅力として「あどけなさ」「無垢」「少女らしさ」が備わっている。これは、外見の美しさとともに、作品を通して繰り返して語られる、彼女の特筆すべき特徴の一つである。

この魅力に最も心引かれた男性の一人が、マイケル・オードリー卿である。

I do not think that throughout his courtship the baronet once calculated upon his wealth or his position as a strong reason for his success. If he ever remembered these things, he dismissed the thought of them with a shudder. It pained him too much to believe for a moment that any one so lovely and innocent could value herself against a splendid house or a good old title. No; his hope was that as her life had been most likely one of toil and dependence, and as she was very young (nobody exactly knew her age, but she looked little more than twenty), she might never have formed any attachment, and that he, being the first to woo her, might by tender attentions, by generous watchfulness, by a love which should recall to her the father she had lost, and by a protecting care that should make him necessary to her, win her young heart, and obtain from her fresh and earliest love alone the promise of her hand. (7)

ルーシーは地位や財産で男性を値踏みするような計算高い女性ではない。オードリー卿の目に映るルーシーは、(人を好きになったという経験もない)穢れを知らない、全く無垢な女性、まさしく「家庭の天使」であった。一方、オードリー卿自身は、この時56歳、「背丈があり、がっしりとした体格のよい人物」である。「白いあご髭を生やしていたため年輩者の威厳を湛えていたが、それは本人の意に反するところであった。というのも、彼は少年のように活発で、この州でも屈指の狩猟家であったからである」(4)と説明されているように、年齢から得られる威厳よりもむしろ、若者のような快活さを誇りにする男性であった。彼は一度結婚したことがあり、先妻との間に年頃の娘アリシア・オードリー (Alicia Audley) がいる。

裕福で地位もあるが、年齢も高いオードリー卿がルーシーを想う気持ちには、先の引用が示すように、純粋な愛情と強い幻想が混在している。何よりも彼女を手に入れたいという想いには嘘はない。しかし、自分の富や地位が彼女にとって魅力であることを認識しながらも、純粋無垢な彼女から真実の愛を得たいと願うのは、幾らか非現実的(幻想的)であり、年若いルーシーに対して夫となることを望みながら父親的役割を担うという口実は、些か偽善的とも思える。彼は、愛してもいない男と結婚をすることは罪深い行為であり、真実の愛情以外からなされた結婚は不幸でしかないという言葉で求婚する。しかし、彼女の返事は彼の期待とは大きくかけ離れたものであった。

“How good you are—how noble and how generous!...but you ask too much of me. You ask too much of *me*! Remember what my life has been; only remember that. From my very babyhood I have never seen anything but poverty.... Poverty, poverty, trials, vexations, humiliations, deprivation! ...Do not ask too much of me, then. I *cannot* be disinterested; I cannot be blind to the advantages of such an alliance. I cannot, I cannot!” (10-11)

嘘のない言葉は偽善の仮面を剥ぎ取ることになる。彼女は、貧乏であった自分には打算を捨て去ることはできず、このような縁談の利点に盲目になることなどできないと率直に答える。嘘のない真実の言葉はオードリー卿の求める彼女の純真さの証であるが、ルーシーの言葉はオードリー卿が最も恐れていた言葉であった。互いに納得の上での結婚という「取引」(“bargain,” 11)を行ない、ルーシーを手に入れることに成功するが、オードリー卿は苦い思いに打ちひしがれる。

He walked straight out of the house, this foolish old man.... He carried the corpse of that hope which had died at the sound of Lucy's words. All the doubts and fears and timid aspirations were ended now. He must be contented, like other men of his age, to be married for his fortune and his position. (11-12)

女性を見る目を信じ、自信に溢れていた彼は、結局、身勝手な幻想を打ち砕かれ、現実を思い知らされることになるのである。

オードリー卿の求婚に関するこのエピソードは、単に「愚かな年寄り」の逸話をではない。物語の冒頭で語られるエピソードとして重要な意味をもつ。まず、物語の主人公「レディ・オードリー」の誕生であり、同時に、彼女の秘密(夫と子どもの存在)と罪(重婚)の誕生であり、これから生じるほぼすべての秘密と罪の契機となる。さらに、ルーシーの外見と内面の不一致は、(思い込みによって真実を見抜けないことを含めて)理想的な女性と犯罪というセンセーショナルな組合せ、さらに、ミスリーディングを読者に助長する仕掛けとして機能する。また、外見や表面的特徴で女性を判断する男性に対するアイロニーとして読むこともできる。さらに、実際には見た目ほど単純ではないという女性の秘密、複雑な女性性を示唆していると考えられるのである。

この場面において(語られない真実があることは否定できないが)彼女の語る言葉には嘘や虚構はない。心にもない甘言も可能であったにもかかわらず、彼女は正直に話している。他人の目には美貌と美徳を備えた幸福な天使のような女性に映っているが、実際には(先の引用で彼女自身が表現しているように)彼女は、自分の人生が「貧乏、試練、いらだたしさ、屈辱、窮乏」で出来ており、「生まれついて不幸な人間」(9)と感じている。例えば、オードリー卿に見初められた家庭教師の頃でさえ、実際の生活はかなり苦しいものであった。彼女と同じ家で女中として働いていたフィービー(Phoebe)は次のように述べている。

“Why, what was she (Lucy Graham) in Mr. Dawson's house only three months ago? ...What was she but a servant like me? Taking wages and working for them as hard, or harder than I did. You should have seen her shabby clothes...worn and patched, and

darned, and turned and twisted... Why, I've seen her come out of the parlour with a few sovereigns and a little silver in her hand, that master had just given her for her quarter's salary..." (27)

両者とも同じただの使用人であるが、家庭教師は女中よりも厳しい仕事であり、給料は非常に安いとフィービーは同情している。ルーシーの服は磨り減った部分に継ぎを当て、何度も繕って、裏返しにしたみすばらしいものであった。こうした苦しい状態にありながらも、オードリー卿に真実の想いを語ったルーシーの人生は一転する。

Pleased with her high position and her handsome house; with every caprice gratified, every whim indulged; admired and caressed wherever she went; fond of her generous husband; rich in a noble allowance of pin-money; with no poor relations to worry her with claims upon her purse or patronage, it would have been hard to find in the country of Essex a more fortunate creature than Lucy, Lady Audley. (53)

社会的地位、立派な屋敷、賛美の声、寛大な夫を得たルーシーは「エセックス州のどこを探してもこのほど幸運に恵まれた人間を見つけることはできそうにない」と評される。レディ・オードリーは、苦難を経験しながらも、結婚によって人の羨む幸福を手にした女性、当時の女性にとってまさしく理想の女性なのである。

4 秘密が生まれる背景：罪の過程と理由

シュレーダーによると、センセーション・ノヴェルの読者の多くは中流階級の女性であった(15)。そして、読者である当時の一般的な中流階級の女性の多くにとって「結婚」は、まさしく夢を叶える唯一の方法でもあり、必要不可欠な現実的手段であった。それゆえ、社会的に恵まれない状況に置かれながらも、レディ・オードリーとなったルーシーの結婚は、当時の女性たちにとって理想であり、憧れであった。ルーシー自身も、女性にとっての結婚の重要性を次のように語っている。

"I learned that my ultimate fate in life depended upon my marriage, and I concluded that if I was indeed prettier than my schoolfellows, I ought to marry better than any of them... I had not been there a month before I discovered that even the prettiest girl might wait a long time for a rich husband. I wish to bury over this part of my life: I dare say I was very despicable." (350-51)

結婚は女性の運命を左右し、人生を決定づける。しかし、どんなに美しい女性であっても、幸福な結婚は決して容易ではない。これは当時の結婚事情、すなわち、結婚市場における女性の状況を映し出した言葉である。そして、彼女は自らが財産目当てに結婚しようとするフォーチュン・ハンター (fortune hunter) として、成功のために「卑しむべき」ことも行なう女性であったことを暗に告白している。

ついに彼女はジョージ・トルボーイズと結婚する。しかし、シュレーダーが述べているように、ブラッドンの描く女性登場人物たちの多くは、結婚に関してより因習的な考え方をもち、

結婚を強く望むが、結局「結婚は破滅的な失望」(30-1)であることを思い知らされる。ルーシーという偽名を使う女性、ヘレン・マルドン (Helen Maldon) の半生はまさしくそうであった。

当時の結婚は個人的問題ではなく、家族の問題である。それは、彼女の父親である (海軍の退役将校) マルドン大佐 (Captain Maldon) の行動にも見ることができる。当時のマルドン大佐の様子をジョージは次のように述べている。

“...my pet lived with her shabby old father, a half-pay naval officer; a regular old humbug, as poor as Job, and with an eye for nothing but the main chance. I saw through all his shallow tricks to catch one of us for his pretty daughter.... He was a drunken old hypocrite, and he was ready to sell my poor little girl to the highest bidder.” (18)

マルドン大佐は様々な「卑しい策略」を駆使し、「一番高い値」をつけた男に娘を「売ろう」と画策する。結婚後も、ジョージのお金を巻き上げ、また、ヘレンが稼ぐ生活費を飲み代に使ってしまうなど、マルドン大佐は父親として娘 (夫婦) に依存した生活を送っている。マルドン親子の関係は、この時代における結婚の裏側を垣間見せている。

ヘレンの夫ジョージの実家は大変裕福であったが、貧しい退役軍人の娘と結婚したことで彼は父親に勘当され、援助を打ち切られる。結婚後も、仕事面においても金銭面においても無計画で、結局、生まれたばかりの息子を妻に残して家を出て行ってしまう。その様子を自ら次のように説明している。

“...my wife was upstairs, sleeping peacefully with the baby on her breast. I sat down and wrote a few brief lines, which told her that I never had loved her better than now when I seemed to desert her; that I was going to try my fortune in a new world; and that if I succeeded I should come back to bring her plenty and happiness, but that if I failed I should never look upon her face again.” (20-21)

置き手紙には「失敗したら二度と君の顔を見るつもりはない」と書かれている。二度とここへは戻って来ないとも解釈できる言葉を残し、それ以後、3年半という期間、全く音信不通となる。

一方、ヘレンは夫に見捨てられた妻という極めて不名誉な状況に置かれることとなる。当時の様子について町の人は次のように証言している。

“They were married here, sir, and they traveled on the Continent for six months, and came back here again. But the gentleman ran away to Australia, and left the lady, a week or two after her baby was born. The business made quite a sensation in Wildernsea, sir...” (244-45) (下線筆者)

「センセーション」という言葉が、作品中唯一ここで使用されている。このことは、この物語世界において (おそらく当時の現実的世界においても)、狭小な共同体で夫に逃げられた妻の存在が犯罪よりも「センセーショナル」であることを作家のブラッドンが暗に示している。この点に関しては、ジョージの親友であるロバートでさえ、ヘレンに同情的であり、ジョージに

は批判的である (241)。夫や父親による娘／妻に対するこうした行為は、社会的にも道徳的にも宗教的にも「罪」ではない。しかし、この作品においては、結婚そのものが「家庭における犯罪」(49) というシュレーダーの指摘が如実に示すように、物語の核心である。

ヘレンもまた、子どもを父親の元に残して家を出る。書き置きには次のように書かれている。

“I am weary of my life here, and wish, if I can, to find a new one. I go out into the world, disserved from every link which binds me to the hateful past, to seek another home and another fortune...” (250)

ヘレンはこれまでの人生を「疎ましい過去」と表現しているが、彼女の人生を顧みることによって、彼女の秘密と罪の陰には、彼女に関わる男性たちの身勝手さや当時の結婚の不条理さなどが隠されていることが見えてくるのではないだろうか。

彼女の秘密が明らかになると同時に、これまで語られなかった男性たちの不都合な秘密も明らかになる。ロバートは、レディ・オードリーの嘘と正体（レディ・オードリーとヘレン・トルボーイズが同一人物であるという真実）について証言ができる人物を探しだすことに成功する。しかし、それは同時に、ジョージ・トルボーイズの嘘と（妻と生まれたばかりの子どもを残して「逃げ出した」夫という）語られなかった真実、彼の正体をも暴くことになるのである。

最後に

「レディ・オードリー」と呼ばれる女性には五つの名前が存在する。すなわち、生まれたときはヘレン・マルドンであるが、結婚によってヘレン・トルボーイズに変わる。しかし、夫に捨てられると自らもその名前を捨て、ルーシー・グレアムと名乗る。その後、再度結婚してレディ・オードリーとなるが、幽閉されるときに名前を取り上げられ、マダム・テイラー (Madame Taylor) という新たな名前を与えられる。この作品の批評において、終始「レディ・オードリー」を使用している批評家もいれば、モントウィラーのように（本論文と同様）、状況に合わせて3つの名前（「レディ・オードリー」「ヘレン・マルドン」「ルーシー・グレアム」）を使い分ける批評家もいる。結婚によって名前が変化する女性にとって、名前の変遷は時に人生の過程を映す鏡であり、その過程の重要性は無視できない。

エリザベス・ラングランド (Elizabeth Langland) は、この作品に関する論文において、著者ブラッドンが様々なことを「秘することを拒絶」(5) していると指摘し、隠すことと暴くことの問題を論じている。これは、この物語には種々多様なものが隠されていることを示している。多くの場合、それは主人公レディ・オードリーに関する秘密である。しかし、その秘密や罪が生まれる過程や理由が語られることによって、それまで意図的に隠蔽されていた秘密、無意識に埋もれていた秘密、あるいは、嘘／悪／罪などとは認識されていなかった事象の真実などが明らかにされる。例えば、レディ・オードリーの秘密とともに、オードリー卿やジョージ・トルボーイズの語られなかった本心、あるいは、語られた嘘など、二人の夫たちの秘密が明らかになる。これはブラッドンがこの作品で仕掛けた「秘密」に関わる一つの戦略と考えることができる。すなわち、より大きな秘密を暴露する陰で、社会的に公に語る事が憚られる内容を密かに開示してみせるのである。

多重的に秘密を暴くこの構図は、この物語世界でレディ・オードリーの秘密が明らかになると同時に、現実世界で当時の女性たちが経験している苦悩も表面化させるという機能をもつ。

娘をできるだけ高く売り楽な生活をしようとする父親、安易に妻子を見捨てる世間知らずの夫、年若い妻に「家庭の天使」の幻影を持つ夫、など男性に関わる実情が明らかにされるのである。そして、実は、探偵役のロバート・オードリーこそが作品に登場する女性たちを不幸にする男性であることが明らかになる。彼は、幸福の頂点にあったレディ・オードリーの秘密を暴き、すべてを取り上げ絶望させ、死に追いつめる。幼い時から彼に想いを寄せていたいこのアリシア・オードリーを失恋させ、(かつて彼女が軽蔑していた)別の男性と結婚させる。フィービーはロバートを狙った火事が原因で夫を失う。そして、(リチャード・ネメスヴェリ(Richard Nemesvari)によれば、実はロバートのイートン時代からの同性愛の相手である)ジョージ・トルボーイズによく似ているという理由だけで、彼の妹クララ・トルボーイズ(Clara)と結婚するのである。²

また、作品の主たる登場人物の「母親」はすべて早世している。ロバートの母、故レディ・オードリーであるアリシアの母、ヘレン・マルドン/レディ・オードリーの母、トルボーイズ家のジョージとクララ兄妹の母―彼女たちは物語が始まった時にはすでにこの世を去っており、物語に登場することはない。そして、ジョージとヘレンの息子のジョージ(Master George Talboys)も10歳になる前に母親を失うことになる。

このように、この物語世界は、「娘」として、「妻」として、「母親」として、すなわち、すべての女性にとって厳しい世界である。一方、ロバート・オードリーは「良い人はみんな幸せで、平和になった」と述べる。この事実は極めて象徴的である。すなわち、ヴィクトリア朝という時代において、「人」とは男性^{ガイナフォビア}だけを指す。女性は排除されており、女性の不幸が男性にとっての幸せで平和だという明確な女性嫌悪が存在していることを知らしめているのである。もちろん、この作品の作家が女性であることを忘れてはいけない。

註

1 1880年代になると、現実世界においては「切り裂きジャック」が、また、小説の世界ではシャーロック・ホームズが登場し、犯罪や事件の謎に対する大衆の興味を一層駆り立てて、ジャーナリズムと推理小説は相互に作用しながら、発展していくことになるのである。

2 この論文では、テキストに書かれない秘密として、ロバート・オードリーを中心とした同性愛的な男性社会の構造を明らかにしている。

引用文献

- Braddon, Mary Elizabeth. *Lady Audley's Secret*. New York: Oxford University Press, 1998.
- Gorham, Deborah. *The Victorian Girl and the Feminine Ideal*. London: Croom Helm, 1982.
- Jones, Anna Maria. *Problem Novels: Victorian Fiction Theorizes the Sensation Self*. Columbus: Ohio State University Press, 2007.
- Langland, Elizabeth. "Enclosure Acts: Framing Women's Bodies in Braddon's *Lady Audley's Secret*." Tromp, 3-16.
- Montwieler, Katherine. "Marketing Sensation: *Lady Audley's Secret* and Consumer Culture." Tromp, 43-61.
- Oliphant, Margaret. "Novels." *Varieties of Women's Sensation Fiction: 1855-1890*, Vol.1, *Sensationalism and the Sensation Debate*. London: Pickering and Chatto, 2004. Ed. Andrew Maunder. 171-90.
- Pykett, Lyn. *The 'Improper' Feminine: The Women's Sensation Novel and the New Woman Writing*. London: Routledge, 1992.
- Nemesvari, Richard. "Robert Audley's Secret: Male Homosocial Desire in *Lady Audley's Secret*." *Studies in the Novel* 27.4 (1995) : 515-28.
- Schroeder, Natalie and Ronald A. Schroeder. *From Sensation to Society: Representations of Marriage in the Fiction*

- of Mary Elizabeth Braddon, 1862-1866*. Newark: University of Delaware Press, 2006.
- Tillotson, Kathleen. "The Lighter Reading of the Eighteen-Sixties." Introduction. *The Woman in White*. Boston: Houghton Mifflin, 1969.
- Tromp, Marlene, Pamela K. Gilbert, and Aeron Haynie. *Beyond Sensation: Mary Elizabeth Braddon in Context*. New York: State University of New York, 2000.
- 村上直之 『近代ジャーナリズムの誕生－イギリス犯罪報道の社会史から』 岩波書店、1995年。

